

2020 年度

梅光学院中学校・高等学校
学校評価書

梅光学院中学校・高等学校

1 学校教育目標

* 学校目標

Beyond the Borders 「自分を越える・国境を越える」

* 生徒目標

学び・経験・奉仕

- ・「学び」: 授業、学校行事、課外授業、課外活動、留学、ボランティアなどあらゆる機会を用いて生徒は学びます。
- ・「経験」: 体験したことを言語化して、他者に伝え、他者からフィードバックを得ることによって「経験」へと昇華する。
- ・「奉仕」: 学んだ知識、技術、能力を他者のために用いる。

2018年度に掲げた教育目標を継続して定め、これに従って教育を行っていく。

2 現状分析

- ・学び: ICTを活用することによって主体的な学びをスライドや動画で発表することができるようになった。生徒のICT活用術は年々向上しており、目を見張るものがある。
- ・経験: 「Wake-Up全員留学」3年目であったが、「新型コロナウイルス感染症」の影響で、中学も高校も実施できなかった。また、オーストラリアを始めとしてアメリカ(ディズニーワールド)、オーストリア(音楽)、韓国等の研修旅行もまったく実施できなかった。唯一できたのはニュージーランド長期留学の1年間のみで、中2(1名)、中3(2名)(当時)が参加した。それぞれ別々の学校に行ったこともあり、英語の力がついただけではなく、「自立心」も芽生え、大変よい経験となった。
- ・奉仕: 生徒会を中心に、校則を自分たちで考えたり、すべての生徒が入る委員会制度を実施したりと大変積極的だった。これによってよりよい学校づくりを目標に、全校生徒たちのために何ができるか考え、実行することはまさに奉仕の精神であった。

3 本年度重点を置いて目指す成果・特色、取り組むべき課題

- ・学び: 英語のプレゼンテーションコンテスト、「マッケンジー杯」でSDGSに関連する英語のスピーチを中高生が実施したことは素晴らしかった。そこで提案されたことを日常の授業や行事等で連携し、実際の活動にしていくことが今後の課題である。
- ・経験: 「新型コロナウイルス感染症」の影響で留学ができなかった分を補完するためオンライン留学を実施したが、コロナの影響が続くようであれば、オンラインで実施できるものがないか、他にも検討しなければならないと思われる。
- ・奉仕: 生徒会が提案した月1回、私服で登校してよい「カジュアルデー」と「サマリアデー」の実施を同日にしたことによってサマリアデー献金が増えたが、何のために「サマリアデー」を実施しているかという説明が不足していたと思われる。この活動をSDGS等につなぐことも課題であると思われる。

4 学校評価総括(取組の成果と課題)

・学び:

①ICT教育-ソフトを検討し、生徒の自主的な学びのために、さらに運用方法について検討が必要である。

②進路指導-中1～高3まで定期的に進路検討会が実施されたのは、よかった点である。これを今後も継続し、早い段階から生徒の志望を聞き取り、それを自主的な学びにつなぐこととする。

・経験:

①Wake-Up全員留学-フィリピンは地方都市で学びをする場合、生徒が病気になった時に対応する病院について問題があり、2020年度はマニラに変更する。

②海外研修・留学-ニュージーランド1年留学、オーストラリア留学、ディズニー研修、韓国研修等の成果の検証が必要である。但し、2019年度は「新型コロナウイルス感染症」関係で、オーストラリア留学及びディズニー研修は中止となったので、これについての検証は次年度実施する必要がある。

・奉仕:今までバラバラに実施していたボランティア活動を宗教部を中心に実施することにより、全学的な活動にすると共に、実施後の振り返りを行うことによって、活動の意義を生徒たちに考えさせるようなしくみづくりが必要である。

5 次年度への改善策

・学び:

①全員担任制-2020年度から全員担任制を実施するため、クラス運営の見直し、生徒支援のあり方、主体的な学びへの導き等が一番の課題となると思われる。但し、これによって生徒の情報共有が進むと思われ、「報・連・相」の徹底にもつながり、それが生徒の成長になると期待している。

②研修:教員の教育方法や生徒の支援に関する研修を頻繁に行う。

・経験:1年間の中でいつ・どのような留学があるかという全般の見える化とそれぞれの留学が生徒のどのような成長につながるかという意味付けが必要である。

・奉仕:宗教主任を中心に、現在実施している献金やボランティアの洗い出しを行い、新規のボランティアとしては地域のボランティア団体との連携ができないかどうか具体的に検討する。

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
国語	① 読解力の育成	<p>○授業者による説明や発問を通じて、筆者の主張や小説の主題を読み解く能力を育てる。</p> <p>○ロイロノートやプリントを活用して問題演習を行う。</p> <p>○授業者や級友の作成した解答を読み、解答作成能力を養う。</p>	<p>A…70%以上の生徒が「80点」以上の解答を作成することができる。</p> <p>B…50%以上の生徒が「70点」以上の解答を作成することができる。</p> <p>C…30%以上の生徒が「50点」以上の解答を作成することができる。</p>	<p>○授業者の発問や生徒からの質問により、各学年作品の主題を読み取ることが出来た。</p> <p>○ロイロノートでの課題提出や、資料を用いながら問題演習・解説を行うことが出来た。</p> <p>○各作品ごとワークシートの解答を確認しながら、語彙力を高め適切な解答作成が出来るようになった。</p>	B	<p>○各学年現代文においては作品の主題を読み取ることが出来たものの、古典分野では理解度の差が生まれてしまった。これを踏まえ来年度はより一層ICT機器を活用し、全生徒が満遍なく古典作品・時代背景・日本語の歴史を理解できるよう取り組む。</p>	川口駿純
	② 言語事項の習得	<p>○文法事項や古文単語、漢文の用字や句法、あるいは現代文で重要な語句、さらには漢字の知識を育成する。</p>	<p>A…80%以上の生徒が一通りの言語事項を習得している。</p> <p>B…60%以上の生徒がそれなりの言語事項を習得している。</p> <p>C…50%以上の生徒が最低限の言語事項を習得している。</p>	<p>○口語・文語文法や漢文句法を作品を読みながら学習することが出来た。</p> <p>○漢字に関しては毎週書き取りテストを行うことで、知識を付けることが出来た。</p> <p>○現代文では接続詞に気を付けながら、作品を読むことで作者の主張や主題を読み取ることが出来た。</p>	B	<p>○文語文法の理解に苦勞する生徒が多くみられた。大きな要因として口語文法の理解が出来ていなかったことが挙げられる。</p> <p>これを踏まえ文法を教科書からではなく、普段の生活の中で使用している言葉と結びつけ文語文法の理解度を上げられるよう取り組む。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
社会	① 基礎学力を育み、学習意欲を高める	<ul style="list-style-type: none"> ○小テストなどを実施して生徒の理解度を把握しながら、理解度を高めるように授業を工夫する。 ○適切な量のホームワークを課し、家庭学習の姿勢を育む。 ○多彩な資料を準備しICTをフル活用して、教科への興味関心を呼び起こす 	<ul style="list-style-type: none"> A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている 	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストや小テストを頻繁に実施することによって、生徒の理解度を把握することができた。 ○中学ではワークシートや作品提出等の課題を課し、自学習慣の定着を図った。高校は自主的取り組みを重視し、自学課題を与えた。 ○教員によるICTの活用に加えて、生徒がタブレットを使用して作品をつくる機会を多く設けることができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストの導入によって、生徒の理解を把握する機会を多く設けることができた。しかし基礎学力の定着といった点では課題が残る。 ○中学生は課題への取り組みを通して、家庭学習や課題提出の習慣を身に付けることができた。高校生は、自身で課題を設定し、日々学習に取り組む姿勢を多くみることができた。 ○昨年度と比較して、生徒自身がiPadを有効活用し、課題に取り組む姿勢を多く見ることができた。 	広木光
	② 大学入試に適応できる確かな学力を養成する	<ul style="list-style-type: none"> ○入試を意識させるため、模試や大学入試過去問などにチャレンジさせる。 ○入試を見据え、計画的に知識を蓄積させる。 ○大学入試に対応するために、必要に応じて課外を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている 	<ul style="list-style-type: none"> ○高IIは進度計画に沿った授業を行い、高IIIは入試を見据えて適宜演習問題に取り組んだ。 ○単元別テストや模試を通して、知識の蓄積を促した。 ○授業内容の理解を深め、大学入試に対応するために、必要に応じて課外を実施した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○演習問題に取り組む機会を多く設けることができたが、入試科目として利用する生徒が少なかった。 ○単元別テストに向けて努力する姿を多く見ることができたが、長期的な知識の蓄積を達成することができなかった。 ○生徒の要望や学習状況に応じて課外を実施し、学力養成に努めた。 	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
数学	① 分かる授業の展開	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小テストなどを実施して生徒の理解度を把握しながら、理解度を高めるように授業を工夫する。 ○ 教科への興味関心を呼び起こすため、タブレットなどICT機器を活用を工夫する。 ○ 生徒の主体的・対話的な深い学びの実現のため授業を工夫する。 	<p>A…80%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。</p> <p>B…60%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。</p> <p>C…50%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストの前に、プレテストなどを行い、理解度を確認した。 ○タブレットを使い、授業中の説明だけでなく、質問・提出物確認のため、積極的に活用した。 ○生徒間で話し合いをさせたり、生徒の解答をお互い見ることができるようにして、解答方法やノートの記入の仕方など確認し合った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストに向けて、通常の授業から意識的に細かく指導していた。 ○タブレットを初めて使用した教員もいたが、専任教員と一緒に、数学科全員でICT教育に取り組んだ。 ○生徒同士で、解答を確認させた授業も行った。お互いの意見や考えを共有し、BESTな解法を身に付けるようにした。 	林 武
	② 基礎力・応用力の育成	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日々演習にきちんと取り組むよう指導し、高い提出率の維持に努める。 ○ 放課後などを活用し、補習（質問会・勉強会）を実施し、基礎学力の向上を図る。 ○ 過去問などの演習を行って、入試に対応できる応用力を身に付けさせる。 	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○未提出者への声掛け、提出者の内容の確認などまめに行なった。 ○放課後の時間を利用して、質問を受けた。特に、留学者の補講、高3の受験者の指導には時間を割いた。 ○演習の時間は、過去問等が乗っているテキストを使用し、指導・解説した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○未提出者には、週担当・個人担当の教員を通じて声掛けをした。また、提出者の内容確認も徹底した。 ○放課後の指導については、留学者のためにも、もう少し時間が欲しかった。 ○過去問を活用した指導は、高3生を対象に、次年度も続けていきたい。 	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
理科	① 自然の物事・現象を論理的に説明できるようになる	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基礎学力の向上と、主体的な学びの姿勢を生徒に身に付けさせるために、予習と復習を習慣付けられる課題を配布する。 ○ 実験方法や結果をもとに、自然の事物や現象を質的・量的な関係や時間的・空間的な関係から説明できるように授業を工夫する。 	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○単元ごとの試験と振り返りにより、昨年度よりも良い点数をとる生徒がふえた。 ○高川を除く全ての学年で探究活動を盛り込んだ実験を行った。生徒は理科としての見方・考え方を通して実験の結果を分析し、その成果を発表することができた。 	A	本年度は生徒自らが実験のテーマを設定して探究活動を行った。継続的に実験を行う中で、ほとんどの生徒が実験の結果を数理的に処理し、表やグラフにまとめることができた。それらから導き出される自然の法則についてグループごとに考察し、それぞれの意見をスライドにまとめて発表できた。	中川 大介
	② 自然の事物・現象を科学的に探究するための資質・能力を身につける	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒に「探究の方法」を習得させるために、自然の現象から疑問を見出し、仮説を立てて検証する「探究」のプロセスを授業へ積極的に盛り込む。 ○ 自然の事物・現象に対する概念や原理・法則の理解を図るために、観察や実験を行い、得られた結果を比較したり、関連付けたりできるよう、授業をデザインする。 	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている☑</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている☑</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ほとんどの生徒が実験の結果から疑問を見出し、新たに仮説を立てる「探究」の姿勢を身につけることができた。 ○ほとんどの生徒が観察や実験を通して得られた結果を図や表にまとめ、前の実験のデータと見比べて他グループと意見を交換できるようになった。 	A	探究活動の中で、実験→成果発表のプロセスを繰り返すことによって、「どんなことに気をつけて実験を進めたらよいか。」「目的を達成するためにはどんな考え方をすればよいか。」を生徒自身が判断できるようになった。また、グループのメンバーと協力し、自分一人では達成できない課題を生徒一人一人が乗り越えることができた。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
保健 体育	①	積極的に運動に親しむ資質や能力の育成	<ul style="list-style-type: none"> ○個人の授業記録により、自身の成長や能力を客観視させる ○iPad等のICT機器を活用した協働的な学習 ○シラバスの整理（男女別授業、使用施設等の再検討） 	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○各種目で授業の記録やipadでの撮影を行い自分自身の課題や良かった点などを把握することができた。 ○遠隔授業等でもダンス動画の撮影、発表会などを行うなど対話的で主体的な学びができた。 ○男女の人数に差があり分けることが難しい。中高で連携を取り競技力の向上に繋がるような仕組みづくりを行った。 	A	<p>体育館、グラウンドのwifi環境がないことからipadを使用することが難しい状況の中カメラ機能などを使いながら生徒たちが主体的に考えさせる授業ができた。</p> <p>また、中高一貫校の特色を生かし、競技力、体力面の向上を図ることができた。</p>	坂本 紗梨
	②	生徒の安全を重視した授業の確立	<ul style="list-style-type: none"> ○熱中症対策（水分補給、帽子的着用等） ○担任、保健室、保護者との連携 ○常設用具の安全管理（ゴール、防球ネット等） 	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○熱中症指数を測定器で計測し、一定以上を超えると授業中止や水分補給のタイミングなどの判断を的確に行うことができた。 ○ケガや事故が起きた場合すぐに保健室と連携を取り対応することができた。 ○使用する前に使用道具の安全管理を教員が行い常に安全管理に努めた。 	A	<p>熱中症の事故を未然に防ぐために保健室と連携を取りながら授業を行うことができた。また、使用道具の安全管理を行い老朽化しているものに関してはすぐに買い替え対応した。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
音楽	①	主体的な音楽活動を通し、音楽を愛好する心情を育てる。	○基本的な音楽知識の習得。 ○主体的に歌唱・器楽をしようとする態度の育成。 ○鑑賞・ワークシートの活用	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○単元別テストの実施により全ての生徒の点数が上がった。○コロナ禍で年度当初はリモートで歌唱、ロイロノート等ICTの活用により録ってもらった実技を個別に指導出来ることで、より生徒一人一人と繋がることができ細かい指導が出来た。制限化の中、例年通りの合唱指導は思うようにならなかったが、指揮や我が校ならではのハンドベルを用いて、中学生の授業で合唱やリコーダーにかかわる新しいアンサンブル、取り組みが出来た。○鑑賞においてもロイロノートが非常に役立ち、通常授業時に数回聴いて終わるものが、生徒が聴きたいときに繰り返し再生、音楽シートをみて鑑賞出来たことで聴き取りテストの点数も上がった。	A	○単元別テストの実施により全ての生徒の点数が前年度より上がったことで年度初めに、音楽は好きだが学校の音楽は嫌いだと言っていた生徒達が、意欲的に鑑賞や実技、毎回の学習態度の変化が見られ、クラシックや教科書の音楽作品にも興味を示し、生徒から興味を持ってたくさん質問を受けるようになった。授業でも生徒が好きな楽曲をピアノで演奏し取り入れることで、クラスで様々なジャンルの音楽の共有が出来て良かった。	大森道子
	②	主体的な音楽活動を通し音楽活動で豊かな感性を育む。さらに専門性を高め、将来の音楽活動の礎を作り上げる。	○基本的な音楽知識の習得。 ○演奏活動を中心にした授業。 ○入試問題への取り組み。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○音楽科においては、テストそのものの見直し、評価の統一、授業での実技レッスンの方法やアンサンブルではそれぞれの楽器を生かし演奏会のためだけでなく日頃からの力をつけていくことなど、様々な課題が挙げられた。作曲など単年の学びから、2年続けて履修出来ることでより深い学び、またそれらを楽譜作成アプリ、ICTを用いてさらに習熟させていくことが出来た。	B	音楽科の定期演奏会では、新しくスライドを使った曲紹介、教員の演奏や、ミュージカルを初めて入れるなど新しい試みが、聴衆である生徒たちの、自主的な鑑賞活動に繋がったことがよかった。高3生においては、高い目標設定を持ち入試問題や課題に取り組めた。音楽科においても、単元テストによりさらに深く内容を進められ、生徒全員が前年度より良い点数を取りことが出来、テスト毎に学習意欲の向上、変化を感じた。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
美術	①	○美術の創造活動の喜びを味わう。（中学）	○各学年の作品制作を通じて、丁寧さと根気強さと完成する喜びを体験する。	各学年の作品が期限内に完成した作品が、 A：9割以上の提出 B：7割以上の提出 C：7割未満の提出となる。	各学年ともに、熱心に作品制作に取り組んだ。欠席の多い生徒の作品については、各担任と連絡を取り合って提出させることができた。	A	各学年ともに、熱心に作品制作に取り組んだ。欠席の多い生徒の作品については、各担任と連絡を取り合って提出させることができた。	重村 雄太
	②	○美的体験を豊かにし、将来にわたり美術を愛好する心情を育てる。（高等学校）	○作品制作（静物デッサン・ステンシル版画・貼り絵など）を通じて、自己を見つめ、自然や美術作品に感動する。 ○美的感覚や価値観を日常生活の中で、主体的に表現できる。 ○自分の将来について進路決定できる。	アンケート等を通して、将来にわたり美術を愛好する心情を育てることが A：目標以上の成果を上げた。 B：目標に見合う成果を上げた。 C：目標に見合う成果に及ばなかった。	創作時間の多い学期に向けて、進捗状況と照らし合わせ、教材の選定をし直した。	A	美的体験を豊かにすることが出来、それぞれが自身の感性を大切にしながら作品を提出することができた。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（教科）

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
英語	①	4 技能型英語教育プログラムの遂行（高校3年生を除く高3の場合はこの代わりに模擬試験における成績の向上）	<p>○カリキュラムに従った授業を行う。具体的には以下のことを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多読 (Xreading) ・語彙(Memrise/Quizlet) ・Key sentences/Personal sentences ・生徒の発話を記録させて評価する <p>○高3の場合は模擬試験における英語の成績の向上を目指した学習指導を行う</p>	<p>○4 技能全てに関して成長を促せた概ね達成できた 80%～ A</p> <p>一部達成できないところもあった B</p> <p>達成できているとは言えない C</p>	<p>高校3年生においてはそもそも模擬試験自体を受験と結び付けて受ける生徒が少なかった。英語能力の高いものは指定校推薦制度などを利用して受験することが多かった。したがって、模擬試験の成績向上という点では数人程度の対象者となり、著しい向上は見られなかった。一方、他の学年で言うと、4 技能を大切にしたいシラバスに従い、概ね授業が遂行され、生徒には特に産出能力において成長が見られた。それは英検の成績にも現れている。特に長い留学経験がない生徒で英検準1級を突破するものが（一次試験だけのものも含めて）複数出たのは快挙だった。</p>	B	<p>4 技能を大切に、特に他の学校では力を入れていないライティングやスピーキングの指導において、本校の英語科は先端的とも言える指導をしてきた。しかし、多読の指導など、全体に対してうまく指導しきれていないものもあり、来年度以降「多読指導」と単元別テストのあり方は（カンニングを防ぎながら電子的にペーパーレスで行う）課題となっている。</p> <p>留学プログラムはWake-Up全員留学が観光できなかったため、その分をいつ行うのか課題となっている。個別の留学、特にニュージーランドは著しい成果をあげ、コロナ禍で制限された生活を強いられながら、英語的にも精神的にも生徒は成長した。</p>	只木 徹
	②	ICTを用いた英語教育の推進	<p>○Quizletなど英語科共通で使っているICTソフト、プログラムを使う</p> <p>○英語科共通で用いていない独自のICTソフト、プログラムを発見または開発して授業に用いて、実績を上げる（語彙学習などに具体的な成果をあげる）</p>	<p>○使用率</p> <p>○具体的な成果</p> <p>○既存のソフト・プログラム使用率 100%=A 90～100%未満=B それ以下C</p> <p>○新しいソフト・プログラム使用の実績あり=A なし=B ありで実績あり=S</p>	<p>英語科では元々多くのアプリを使用して指導している。ただ、今回はQuizletやMemorizeなどこれまで使ってきたアプリの使い勝手が見直され、さらに多読のXreadingの使用率が上がらないことが課題となった。今後、アプリの使用は根本的な再検討が必要。一方で、Socraticなど新しいアプリを用いて、英検等の共通教材を開発、共有できるようになり、新しい動きも出たことは評価できる。</p>	B	<p>これまで使用してきた学習用アプリを再検討しなければならない。また、電子教科書がうまく作動しないことが多く、次年度からは紙の教科書に戻るなど、ICTの技術上の発展がまだ追いついていない現状もあり、そのはざままで工夫しながらICTを使いこなしていかなければならない。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
技術・家庭	① 実践的な授業の充実	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎的知識・技術の定着 ○ICT機器を活用した教材の工夫 ○実習を通じて危機管理能力やコミュニケーション能力を身につけさせる 	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ICT機器や、カフートを活用し、野菜の旬や洗濯表示の定着に繋げることができた。 ○今年度からはペーパーレステストに切り替え、さらなるICTの活用を模索した。 ○遠隔授業の際に、家庭での食事作りを課題として課し、自宅という慣れた空間での危機管理能力を身に付けることができた。 	A	遠隔授業の期間に食事作りという家庭での役割を与えることで、自らが家庭の一員だという意識を持ち、家族とのコミュニケーションにもつなげることができた。	深名好
	② 地域に根ざした技術・家庭教育の実践	<ul style="list-style-type: none"> ○行事食や郷土料理など地域特性の理解 ○梅光学院幼稚園と連携した保育実習 	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○全国のお雑煮について調べ、実際に調理をして試食をし、地域特性を理解した。 ○感染症対策のため、今年度は実施できなかったため、課題で作成した絵本を、子育て支援センターへ贈呈した。 	B	今年度はおさかな料理教室を実践し、中学1年、3年、高校1年が鯛をさばき方を確実に身に付けることができた。下関という海産物の豊富な地域に生まれた特性を生かし、今後はさらなる技術向上に努めたい。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
情報	① 情報モラル教育の充実	○ニュースなど身近な話題で情報モラルに関係したものがあれば、随時生徒に提供していく。 ○生徒同士の話し合いを通して、情報モラルについての理解を深めさせる。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	ネットいじめや、インターネット詐欺など身近な話題には多く触れることができたが、遠隔授業時に実施をしたこともあり、生徒同士の話し合いや活発な意見の交換までには至らなかった。	B	今後の遠隔授業にも備えて、どんな状況でも実践可能な授業内容に改善していく。	森田 裕介
	② パソコン操作のリテラシーを身につける	○OfficeやMac Book、iPadを活用し、基本的なパソコン操作の知識を身につける。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	officeだけでなく、プログラミング授業の一環で、新しくHP制作の授業を取り入れた。スマホしか扱えないデジタルネイティブから十分な脱却ができた。	A	来年度は有償になることから、本年度と同様のプログラミング授業は実施しないが、新たにVBAを取り入れ、生徒の主体的な活動を促したい。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（教科）

学校評価における部門評価							
教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
宗教	① 福音を聞くこと、知ること、信じる こと。神と自分と他者と、神の造ら れた被造物を愛し仕える生き方(キリ スト教精神)を身に着けること。	授業において、旧約聖書・新約聖書その ものを取り扱い、神・人間・人生につい て、命の糧、教養を得る。	A 80%以上の生徒が目標を達成できて いる。 B 60%以上の生徒が目標を達成できて いる。 C 50%以上の生徒が目標を達成できて いる。	コロナの年であったが、中学と高校に分 け、同時配信しながら、同じテーマを、 5人の教員が創意工夫して、あらゆる角 度から授業を展開をすることが出来た。 テキストを2冊やり終えることが出来 た。また夏休み前は性教育を連続で暑 かった。3学期はなるべく同時配信を用 いず、教員がライブで、週をずらして、 同じテーマに取り組み、一貫校として全 学年共通理解を持てるようにした。毎回 Formsクイズをし、授業への集中と知識 の向上を図った。	A	中高と2つに分けているため、大教室で のレクチャーが続くことになった。授業 において、生徒の積極的参加、グループ ワークやプレゼンを増やし、よりインタ ラクティブな授業になれるように、また 中高生の直面する問題を取り扱いたいと 願っている。	後 藤 献 一
	② 聖書、キリスト教文化を理解 し経験すること。	地元の教会の礼拝、イベントに出席し、 信仰生活を中高生のうちに体験する。そ のレポートを提出する。継続して参加す るよう勧める。	A 80%以上の生徒が目標を達成できて いる。 B 60%以上の生徒が目標を達成できて いる。 C 50%以上の生徒が目標を達成できて いる。	非常事態宣言が数ヶ月あり、リアルな地 元教会を体験してもらおうフィールドワー クは必須項目ではなく、オプション課題 とした。他に大学と連携して、金曜夜の BCCの集会を行い、夏と春のキャンプを 開催し、多くの生徒が自主的に参加し た。	B	新入生(中1・高1)にとって、宗教の点 の取り方が難しかったかもしれない。地 元教会参加はオプションの自由選択にし たが、する生徒としない生徒、やり方が つかめていない生徒と点数が分かれた。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価							
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
教務部	① 授業の実質化（授業時数の確保）	○行事の精選 ○単元別テストによる授業回数の確保	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	新型コロナウイルス感染症の流行により、政府から休校の勧告などあったが、4月以降即時双方向型の遠隔授業に切り替え、授業日をほとんど潰すことなく対応できた。	A	中高における遠隔授業は、対面と比べて学習効果や集団での活動ができないことなどの点で課題がある。3密を防ぐなど、感染を防ぐ手立てを徹底して、なるべく対面授業を実施する方向で進めてきた。山口県では大きな流行の波はなかったが、今後そのような時の判断が求められる。	只木徹
	② 学校行事や時間割などを適切に計画し、また、教材備品等の環境を整える。	○授業に支障のないように、時間変更や教材の発注を行う。 ○時間割編成時、完成時に必修科目を確認する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	学校行事等は新型コロナウイルス感染症の流行でしばしば変更を余儀なくされたが、教務的に問題なく変更を処理できた。 時間割作成後必修科目のチェックをして漏れがないようにした。 教材備品も常に必要なものがある状態に保つことができた。	A	学校行事については、より時間的な余裕を持って準備することが今後の課題と考える。	
	③ 学籍・成績管理に関する事務処理を迅速に行う。	○生徒の異動が起きた際、転入試験の準備、退学関係書類の作成など、迅速に事務処理を行う。 ○Siemsの設定と調整を迅速に行い、成績処理などを実行する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	転入試験に適切に対応して処理できた。 退学や転出事務も適切に迅速に行えた。 Siemsの設定等業務に支障なく設定できた。	A	今後の課題としては、Siemsの設定で、使っていない機能などを洗い出し、より充実した教務システムの利用、運用を目指したい。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価							
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
生徒支援部	① 自主的に学校生活を送るよう支援する	○生徒会活動の活発化 ○委員会活動の活発化	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	生徒会活動が今までになく活発に行うようになり、規則の見直しや、行事の充実などが行えた。 委員会が実質化し、全生徒を巻き込んで学校生活の様々な場面で生徒が自主的に活躍するようになった。	A	今年度の生徒会及び生徒たちの活動は充実しており、自主性が育まれた。しかし生徒会の執行部は1年任期のため、この活動が次年度以降も引き継がれるか、が最大の課題となっている。	只木徹
	② 発達障害等に関して全校で情報を素早く共有し健やかな発達を促す	○毎日朝と放課後に全教員で情報共有のための会合を行う ○毎週職員会議を行い関係の情報を共有する ○毎週非常勤講師を含めて研修会を開催し、関係の情報を共有する	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	毎日おこなわれる教員の朝会、帰りの会において、その日の生徒の様子を全クラスに関して共有しており、発達障害などをはじめとする課題に関して、学校として一致した方針で指導することができた。 毎週月曜日放課後に職員会議、金曜日放課後には研修会を行っており、そこでさらに詳しい生徒の情報を共有したり、指導方針を議論したりできた。	A	課題の共有は徹底的に行うことができた。それでも、困難な指導事例もあり、スクールカウンセラーなども交えて指導方針を決めてきた。継続して指導することが肝要だが、家庭の問題などもあり、学校では踏み込めない問題があって、そのことは課題として残る。	
	③ 問題行動に関して全校で情報を素早く共有して生徒の健やかな発達を促す	○毎日朝と放課後に全教員で情報共有のための会合を行う ○毎週職員会議を行い関係の情報を共有する ○毎週非常勤講師を含めて研修会を開催し、関係の情報を共有する	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	毎日おこなわれる教員の朝会、帰りの会において、その日の生徒の様子を全クラスに関して共有しており、発達障害などをはじめとする課題に関して、学校として一致した方針で指導することができた。 毎週月曜日放課後に職員会議、金曜日放課後には研修会を行っており、そこでさらに詳しい生徒の情報を共有したり、指導方針を議論したりできた。	A	問題行動はどのような体制を組んで対処しても、なくなることはない。個々のケースを見れば、完全解決ということも難しい。それでも、教職員と保護者の間で透明性が高い指導を続けていくことが大切である。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価							
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
進路指導部	① 高川生徒の希望進路実現を支援する。	○高川生徒が進路志望を固め、希望進路に進めるように支援する。 ○支援方法は、高川生対象の進路相談、課外授業、個別指導、小論文指導、面接・プレゼン指導等による。 ○FINE SYSTEM、Compass、K-Navi等の効果的な活用を検討し、生徒保護者に適切な情報を提供する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○80%以上の生徒が第一志望に合格することができた。 ○進路検討会によって生徒の弱点やサポートの必要性を検討し、適切に指導教員を配置して進めることができた。 ○合格可能性をCompassなどで確認をしながら受験方式や志望大学を決定することができた。	A	進路検討会を定期的に関き、生徒の状況を確認できたこと、Teamsを活用して情報共有ができたことで生徒の第一志望合格率は高い。ただし、国公立や難関私立など、高い目標を掲げる生徒が依然として少ないため、進学実績としてはまだまだ満足できる数字ではないのでさらに改善していく必要がある。	重村雄太
	② 生徒の進路実現のために進路検討会を定期的実施し、全教員で生徒を支援する体制づくりをする。	○進路検討会を各学年学期に最低2回実施する（3学期は1回の年間5回） ○進路検討会の結果に基づき、担任はクラスの教科担当に注力すべき生徒やクラスの現状を伝え、成績向上のための指導を実施してもらう。 ○中学から高校までの6年間の進路指導計画を作成、または実施の協力をする。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○高1、2の進路検討会が1度しか開催することができなかった。 ○生徒の状況等についてはTeamsやSiemsを活用し情報共有が確実になされた。 ○次年度の進路指導計画を作成することができた。	B	進路検討会の回数が目標に到達できなかった点がマイナスではあるが、会議自体を開催することよりも情報共有が非常勤講師を含めてできたことが大変大きな成果である。また、指導担当者とも密に連絡をとることができ、全教職員で支援する体制づくりができた。	
	③ 大学等連携やキャリア教育推進により、生徒の進路意識と学力向上のための環境整備を行う。	○生徒が主体的に進むべき進路について深く考えられるための進路ガイダンス、講演会等を実施し、生徒の進路意識向上を実現する。 ○年間の進路ガイダンス、講演会、研修会、自習室、進路資料室の整備をする。 ○進路関係の環境を整備し、学校全体が勉強をする雰囲気になるよう協力する。 ○夏期課外や個別指導を実施し、学力向上に効果的な指導を行う。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○進路ガイダンスを定期的実施することができ、生徒の満足度も大変高い。OSにおいても本校の進路指導についてのプレゼンをする生徒もいた。 ○年間の進路ガイダンスに関しては株式会社日本ドリコム、株式会社ライセンスアカデミーなどと連携をし、適切な時期に適切なガイダンスを実施することができた。 ○夏期課外では生徒保護者の満足度も高く、次年度の実施も決定した。	A	探究の授業や大学等連携卒業研究の指導に多くの時間と全教員の協力を得ることができ、例年にも増して充実したキャリア教育を推進することができている。また、進路ガイダンスにおいても「行ける大学」ではなく「行きたい大学」を発見し、志望校にする生徒が増えてきているので、現時点の成績で生徒の実力をはかるのではなく、育てる意識を教職員がもつようになればさらに進学実績が向上すると考える。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価							
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
宗教部	① ミッションスクールに導かれたことにより、福音を聞き、神の言葉を聞く機会を得る	○毎日の朝の礼拝に出席する ○特別チャペル・イベントの実施 ○修養会 ○教職員聖書研究会 ○宗教委員(生徒)の充実 ○保護者へのアプローチ	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	コロナ禍や天候において、急遽オンライン礼拝になる日もあったが、毎日、全校生徒、礼拝を持って始めることが出来た。密を避けるため、中高を、山田ホールと教室に週ごとに入れ替えた。毎回、Teamsと予備としてYouTubeの2つでライブを配信し、教室に届けた。いつでもアーカイブで見られることも可能である。内外の説教者のご協力をいただき感謝であった。今年から学院礼拝として大学と連携して	A	生徒がメッセージャーとして立つこともあり、また英語のみによるEnglish Serviceも何度も行われた。奏楽者において、生徒ももっと参加出来るように願っている。また礼拝への姿勢を向上させたい。春と秋の修養会はコロナのため中止されたが、新年度は大学とともに実施したいと願っている。保護者へのアプローチがなかったが、アーカイブを観れるようにするか、聖書を学ぶ会を開いても良いかもしれない。	後藤 献一
	② キリスト教やミッションスクールの豊かな文化、行事、伝統を体験する	○入学礼拝・卒業礼拝 ○始業礼拝、終業礼拝 ○花の日礼拝、収穫感謝礼拝 ○イースター、ペンテコステ、クリスマス礼拝 ○バイブルキャンプ	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	入学礼拝・卒業礼拝は、コロナ対応として、それぞれ中高に分けて2度ずつ実施された。2度目のサマーバイブルキャンプ、初めてのスプリングバイブルリトリートも、どちらも中高大合わせて50名近くが自主的に参加した。学院に教会をということで、BCCが4回クロスライトで開催され、多くの生徒が参加した。花の日、収穫感謝の開催と施設訪問はなくなった。	A	今年から礼拝時間が20分から15分になり、短いながらも、説教者が努力しコンパクトにまとめてくださった。クリスマス礼拝は大きな海のホールで行った。入学・卒業礼拝において、保護者の数が限られ、在校生は参加することが出来なかったが、早く一緒に経験できることを待ち望んでいる。中高大と連携して、夏と春のキャンプ、BCCを支援して下さる学院に深く感謝したい。	
	③ キリスト教精神・隣人愛を実践する	○サマリア募金を通して、貧困にある子どもたちを支援する ○施設を訪問し、愛を表す ○ボランティア活動をする	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	中高で4人のチャイルドスポンサーになっており、毎月滞りなく行われた。3学期は生徒会のリードによりサマリアアカジュアルデーとして、私服登校生は2000円の献金をする事になり、募金額が上がって成果があった。また学校祭の収益とクリスマス献金も届けられた。宗教部を通して地域と構内清掃が行われた。	A	このようなコロナ禍において、施設訪問が制限される中、どのようなボランティアが出来るか探っていきたい。宗教部以外の生徒も巻き込みたいと願っている。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（分掌）

*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価							
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
ICT 教育 推進 部	① 生徒に「主体性」「協働性」「創造性」を身につけさせる。	○生徒が主体的にICTを活用して学校行事をよりよいものにしていくサポートをする（連絡手段等）。 ○生徒が協働してICTを活用し、学校に付加価値を与えるものを作るためのサポートを行う。（ICT委員会の運営等）	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○学園祭や研修旅行など、様々な行事でiPadを活用できた。 ○ICT委員が率先してiPadを使用する上でのルール作りを行っている。本館3階廊下の掲示板など、生徒が主体となってICT機器の活用が行われている。	A	生徒自らがスライドや動画、アンケートなどを作成し、行事を盛り上げた。ICT委員は2学期までほとんど機能していなかったが、3学期からは生徒会与連携して積極的なルール作りや校内電子掲示板の設置を行った。	中川 大介
	② ICTを用いた授業の導入・定着と授業外でのICT活用の促進	○教員の授業へのICT導入サポート、研修の実施と次年度に向けたICT研修の考案 ○学校行事、部活動での活用イベントの企画	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○非常勤の先生を含むすべての教員が授業でiPadを活用できるようになり、即時双方向型の遠隔授業もスムーズに行えるようになった。	A	現在、いつ生徒が学校に登校できなくなっても即座に遠隔授業に切り替えられる体制が整っている。また、通常授業においても課題の配信や生徒との連絡手段としてiPadを活用する教員が増えた。	
	③ 校内ICT環境の維持・整備	○教室内のICT機器、教職員の使用する機器の管理、メンテナンス ○生徒、保護者の質問対応と、ICTに関するトラブル対応と担当業務の確実な遂行	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B以下	○授業や行事を円滑に進めるだけのICT機器は整備されている。一方で教員への貸し出し機器の管理が甘く、紛失が多い。 ○保護者から多きなクレームはなかった。	A	高校の各教室にプロジェクター、ホワイトボード、音響スピーカーが設置された。また、HDMIケーブルとiPadをつなぐコネクタの紛失が後を絶たない。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（学年）

学校評価における部門評価								
学年		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
中 学 校	①	生活と学習の場としてのコミュニティを作る（支え合う学級、学年、中学となる）	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒会（委員会）活動を通して生徒主体の学校作り ○「全員担任制」によって学校全体で生徒一人ひとりをケアする ○「全員担任制」によって一人ひとりの生徒の情報を全校で把握する 	<ul style="list-style-type: none"> A 支え合う学級、学年、中学校が達成している B 概ね達成しているが一部達成できていない C 多くの場面で達成できていない 	20年度は全員担任制を取り入れ、生徒一人ひとりを教員と職員全体でケアする体制となった。また生徒会活動が盛んとなり、生徒が自主的に学校活動に参加するようになった。しかし一方で、互いを支え合うコミュニティ作りに関しては、特に中1がWake-Up全員留学に行けなかったこともあり、達成度はBとなった。	B	生徒の自主的な活動をさらに助長し、互いに支え合うことを明確に目標として意識させることが必要である。	只 木 徹
	②	学習習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストによって日頃から学習する習慣をつける ○全員担任制により個々人のニーズを把握し学習意欲につなげる ○留学など学校のプログラムを通して学習意欲を引き出す 	<ul style="list-style-type: none"> A 大多数の生徒がこの目標を達成している B 概ね達成しているがまだ達成できていない生徒が一部に存在する C 多くの生徒が達成できていない 	単元別テストは今年度導入だが、全教科で浸透した。ほぼ全教科で平均点が上がり、生徒の学習への動機付けにつながった。	A	単元別テストになると回数が増える。テストが気になり、勉強をするようになったが、気になりすぎて、勉強疲れを起こす生徒が発生した。この問題に関し、来年度は教科と教務と担任団が生徒の様子をより詳細に観察しながらテストを実施していく必要がある。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2020年度（学年）

学校評価における部門評価								
学年		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
高等学校	①	学習習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> ○単元別テストによって日頃から学習する習慣をつける ○全員担任制により個々人のニーズを把握し学習意欲につなげる ○留学など学校のプログラムを通して学習意欲を引き出す 	<ul style="list-style-type: none"> A 大多数の生徒がこの目標を達成している B 概ね達成しているがまだ達成できていない生徒が一部に存在する C 多くの生徒が達成できていない 	単元別テスト導入の結果、ほぼ全教科で平均点が上がり、評定平均に関して積極的な貢献があった。多くの生徒にとって学校での勉強は「やればできる」というものになったと思われる。	B	大学入試を明確に意識している生徒は学習習慣が確立している場合が多いが、大学入試のことを考えていないか、まだはっきり決まっていない場合は、学習に対する態度がなかなか積極的なものになっていない。この点に関して今後重点的にテコ入れをしたい。	重村雄太
	②	自己の進路について考え、進路目標に基づいて学校生活を設計する	<ul style="list-style-type: none"> ○進路を考えるプログラムを行う ○模擬試験の利用とその振り返りの機会を設ける ○高大連携プログラムを進路指導に結びつける 	<ul style="list-style-type: none"> A 大多数の生徒がこの目標を達成している B 概ね達成しているがまだ達成していない生徒が一部に存在している C 多くの生徒が達成できていない 	音楽科の3年生の場合はよく進路を考えていたが、AクラスBクラスの場合、進路が最後まで明確にならない者もあり、進路指導という点で今一つだった。高2も意識はまだまだで、今後の改善が見込まれる。	B	高大連携プログラムや、大学説明会等、進路に関係ある行事やプログラムはいくつも提供しているが、それが生徒の心の奥底まで届かない。生徒一人ひとりと進路に関してとことん話し、それを全校の教職員と共有しながら指導を続けることが必要である。	
	③	生徒が学校を自らのコミュニティと自覚し生徒主体の学校作りを行う	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒会活動の活発化 ○委員会活動の活発化 	<ul style="list-style-type: none"> A 大多数の生徒がこの目標を達成している B 概ね達成しているがまだ達成していない生徒が一部に存在している C 多くの生徒が達成できていない 	生徒会がこの10年で最も活動的となった。校則のあり方を今の時代に合ったものとなるよう独自の提案をし、試行して、さらにアンケートをして生徒や保護者、教職員の意見も取り入れて良いものにしてきている。形骸化していた委員会組織を活性化させ、全校の生徒を学校運営に巻き込み、自主的な活動が激増した。	A	行事や規則から改革が始まった。生徒の自主的な学校運営参画は、授業のあり方や、評価のあり方まで進むことが望まれる。生徒会の執行部は毎年変わるため、こうした体制の維持、継続が大きな課題である。	